歴史を歩く⑨

町文化財紹介コーナー

「麦田下遺跡」

麦田下遺跡

今年の10月29日、ちょうど文化祭の準備を急いでいる頃、岡別府集落内の水田を基盤整備している施工業者から電話があった。

内容は、工事中に土器が発見されたというものだ。いわゆる「工事中発見」というものである。文化財保護法上、工事等で、土器などの文化財を発見した場合は、現状を変更することなく、速やかに教育委員会に届けることが義務付けられている。

現場は、大隅グリーンロードが走る大橋の橋梁から、約600m上流に上がった山際の田んぼにあった。現場の現状は、1000㎡くらいにわたって、土器が散布している。耕作土をはいでいたら、土器があちこちに見つかったという。一帯が小字で「麦田下」という地名であるため、発見以来、「麦田下遺跡」と呼んでいる。

土器が出土している範囲内を試掘し、実際に遺跡がどこまで広がっているのか、工事によってどこまで破壊されるのか、どんな遺跡なのかを調べた。これらの情報から、必要最小限の調査方法を模索する。

この遺跡の重要な部分は、約4m×4mの範囲に広がる「土器だまり」であった。「土器だまり」とは、土器の廃棄や、あるいは祭祀（さいし）などによって、一定の箇所に集中的に土器が出土している場所である。ここは、施工業者が遺跡を発見するきっかけになった場所でもある。

土器だまりの調査に焦点をしぼり、周辺に散布する土器は、調査員立会いのもと、工事の掘削時に採取する方法を採った。調査方法としては十分ではないが，工期を考慮すれば，調査にかける時間はあまりない。

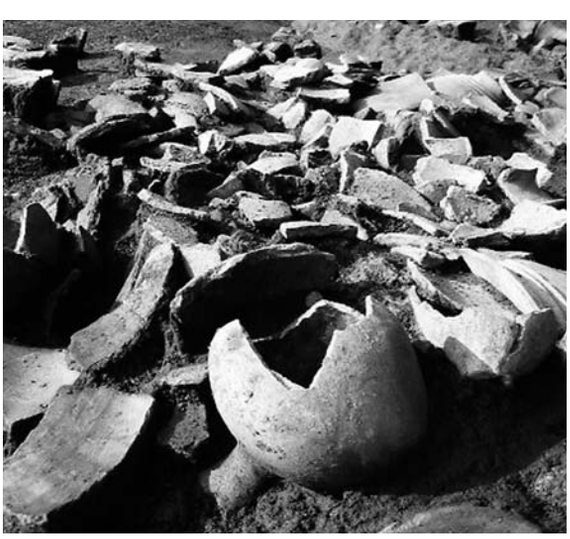
かくして11月1日から教育委員会のスタッフ数名で土器だまりの調査を行うことになった。

調査をしながら500点以上もの土器を一つ一つ見ていくと、弥生時代後期（約1950～1750年前）の要素を持つものと弥生時代中期の後半（約2000年前）の要素を持つものがある。中期と後期の移行期に作られた土器ではないかと推測する。

調査を進めていく間で、興味深いことが分かった。これまで見たことも無い土器が多く含まれていた。少なくとも在地で作られていた土器の形状とは明らかに違う土器だ。詳細は今後の研究によるが、宮崎、大分などの東九州系土器の特徴を持つもの、四国西部の特徴を持つものがあるようだ。しかし、これらの地域で出土している土器と類似しているが、各地でこれまで発見されている土器のいずれとも、趣が違う。

調査終了後、これらの土器を洗浄したうえで、数名の研究者や専門員に見てもらった。皆、一見して、「何だ、これは…。」と、絶句する。麦田下遺跡の弥生土器は、かなり特異なものらしい。

実は、南九州の弥生時代について解明されていない事が多い。麦田下遺跡の土器は、今後西日本の弥生土器を研究する上で、貴重な資料として取り上げられるだろう。

危うく排土とともに、誰の目に触れることなく消えていたかもしれなかった麦田下遺跡―。施工者の発見と届出は、結果として後世に郷土史解明の重要な手掛かりを残す事となったのである。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】